つもの（以下，凸帯文系と呼称する），口縁端部に粘土紐を貼り付けた逆Ｌ字形口縁のものの３種類がみられる。口縁部の形態の比率は表７にまとめたとおりであるが，ＳＲ０４資料を層位ごとみると，如意形口縁と凸帯文系については微量ながら次第に減少し，逆Ｌ字形口縁が増加する傾向が読み取れる。次に施文についてであるが，口縁端部に施される刻目と胴部に施される区画文について検討する。まず，口縁端部の刻目は甕全体の約50％のものに施されており，口縁端部全面を刻むものと口縁端部下端を刻むものがみられるが，前者がわずかに後者を凌いでいる。口縁端部の刻目は総じて軽く小さい刻目が施される傾向がみられる。胴部に施される文様（区画文）には，段・ヘラ描き沈線・刺突文・櫛描き沈線があり，これらは口縁の形態ごとに異なる傾向を持っている。如意形口縁のものではヘラ描き沈線少条が盛行するが，文様を施さない無文のものも量的には多い。凸帯文系のものは無文の傾向が著しく，わずかにヘラ描き沈線少条がみられる程度である。逆Ｌ字形口縁のものではヘラ描き沈線少条とヘラ描き沈線多条の両者がみられ，櫛描き沈線のものもみられる（表８）。ＳＤ５０・ＳＲ

	如意形	凸系	逆Ｌ字形	小計
SD48	34(73.9)	8(17.4)	4(8.7)	46
SD49	22(91.7)	1(4.2)	1(4.2)	24
SD50	163(74.4)	12(5.5)	44(20.1)	219
SR04下層	71(86.6)	8(9.8)	3(3.7)	82
SR04中層	198(79.5)	17(6.8)	34(13.7)	249
SR04上層・支流	40(78.4)	2(3.9)	9(17.6)	51
SR03	13(86.7)	1(6.7)	1(6.7)	15

表７　甕形土器の口縁形態

	口縁の形態	無文	段	ヘラ沈少条	ヘラ沈多条	刺突文	櫛沈	小計
SD48	如意形	15(44.1)	1(2.9)	15(44.1)	2(5.9)	1(0.2)		34
SD49	如意形	2(9.1)		15(68.2)	4(18.2)		1(4.5)	22
SD50	如意形	56(34.4)	3(1.8)	79(48.5)	24(14.7)		1(0.6)	163
SR04下層	如意形	36(50.7)	4(5.6)	21(29.6)	10(14.1)			71
SR04中層	如意形	63(31.8)		106(53.5)	29(14.6)			198
SR04上層・支流	如意形	18(45.0)		20(50.0)	2(5.0)			40
SR03	如意形	8(61.5)		2(15.4)	2(15.4)		1(7.7)	13
SD48	凸系	8(100.)						8
SD49	凸系	1(100.)						1
SD50	凸系	9(75.0)		3(25.0)				12
SR04下層	凸系	8(100.)						8
SR04中層	凸系	17(100.)						17
SR04上層・支流	凸系	2(100.)						2
SR03	凸系	1(100.)						1
SD49	逆Ｌ字形	1(100.)						1
SD49	逆Ｌ字形	1(100.)						1
SD50	逆Ｌ字形	15(34.1)		8(18.2)	19(43.2)		2(4.5)	44
SR04下層	逆Ｌ字形				3(100.)			3
SR04中層	逆Ｌ字形	16(47.1)		6(17.6)	6(17.6)		6(17.6)	34
SR04上層・支流	逆Ｌ字形	6(66.7)		1(11.1)	1(11.1)		1(11.1)	9
SR03	逆Ｌ字形	1(100.)						1

表８　甕形土器の文様

０４の甕形土器は，如意形口縁のものが大半を占めながらもその一部にすでに逆Ｌ字形口縁のものが出現しており，文様ではヘラ描き沈線少条が盛行しているが，新しい要素であるヘラ描き沈線多条やごくわずかながら櫛描き沈線も含まれている段階のものと考えられる。

以上，龍川五条遺跡の弥生時代前期の土器について簡単にまとめてきた。これらの土器は段に象徴される古い要素や新しい要素である櫛描き沈線がみられるなど，若干の時期幅を含んではいるものの，その大半は弥生時代前期後半に位置付けられる特徴を有しており，弥生時代前期後半の中でも古い様相を持つ一群の土器として認定できよう(7)。

（２）弥生時代前期の石器

龍川五条遺跡では，遺跡全体で 553点の石器を出土した。これらの石器は，ほとんどが弥生時代前期後半～中期初頭にかけてのものであり，香川における水稲耕作の定着の一側面を示すものであるといえよう。ここでは，出土した石器の器種組成や使用石材についてまとめる（表９）。なお，ここで分析の対象とする石器はすべて遺構内から出土したものであり，包含層から出土したものは除いている(8)。

遺跡全体の石器の器種組成は，打製石庖丁18点，磨製石庖丁19点，打製石鎌７点，磨製石鎌１点，磨製太型蛤刃石斧６点，打製石鍬（打製石斧を含む）56点，磨製柱状片刃石斧11点，磨製扁平片刃石斧２点，打製スクレイパー45点，打製石錐21点，楔形石器３点，砥石６点，打製石鏃134点，打製石剣５点，磨製石剣２点，磨石２点，磨製紡錘車５点，磨製石棒２点，不明石器３点，素材（石核）２点という内訳になっている。これを用途別にみると収穫具45点（12.9%），伐採具６点（1.7%），土掘具56点（16.0%），加工具88点（25.1%），武具141点（40.3%），調理具２点（0.6%），紡織具５点（1.4%），祭祀具２点（0.6%），用途不明３点（0.5%），素材（石核）２点（0.6%）となっている。

次に，使用している石材についてみると，サヌカイト281点（80.3%），安山岩（角閃石安山岩・讃岐岩質安山岩を含む）20点（5.7%），結晶片岩34点（9.7%），粘板岩１点（0.3%），緑泥片岩４点（1.1%），ヒン岩３点（0.9%），砂岩５点（1.4%），泥岩１点（0.9%），赤色チャート１点（0.6%）の９種類の石材が認められる。サヌカイトの割合が圧倒的に高いのは，サヌカイト産出地という土地柄を反映しているためであろう。用途別の石材の使用状況は収穫具・土掘具・加工具・武具はサヌカイトを，伐採具・紡織具・祭祀具は結晶片岩を，調理具は砂岩を主体的に使用していることがわかる。また，石器全体のうち打

製石器は291点（83.1%），磨製石器は49点（14.0%）で，圧倒的に打製石器が多い。

中部瀬戸内地方における弥生時代前期の石器組成は，打製石鏃が最も多く，削器（スクレイパー）がこれにつづき，両者で75%近くを占めるとされている[9]。龍川五条遺跡の石器組成をみると，打製石鏃が多数を占めており，その比率も類似した値を示している。中部瀬戸内地方の弥生時代前期に石鏃が増加する現象を，環濠集落の成立と合わせて農耕社会成立期の緊張関係を反映したものとする見解[10]もあるが，龍川五条遺跡の資料からはそれを判断できる材料はない。また，土掘具（打製石斧・石鍬）が一定量存在していることも特徴としてあげられる。石器全体における土掘具の割合（16.0%）は，収穫具とほぼ同じ割合（12.9%）を示している。土掘具は根茎類の採取などに用いられた地下植物獲得型の生業を体現するものと評価されており，一方の石庖丁をはじめとする収穫具が水稲農耕を体現している石器と考えられることから，縄文的な生業（地下植物獲得型）と水稲農耕の両者を生産基盤として集落を経営していたものと考えられよう。

龍川五条遺跡では，サヌカイトの剥片類が少ないものの，素材（石核）がわずかにみられることから，集落内において石器生産を行っていたことがうかがえる。しかしサヌカイト以外の石材の素材や剥片類がほとんどみられないことから，これらについては集落内で生産を行わず，製品あるいは半製品として集落内に搬入されたと考えられる。

	収穫具	伐採具	土掘具	加工具	武具	調理具	紡織具	祭祀具	不明	素材	小計
SD48	4(12.5)		2(6.3)	8(25.0)	18(56.3)						32
SD49	2(20.0)		3(30.0)	4(40.0)	1(10.0)						10
SD50	11(21.6)	1(2.0)	7(13.7)	10(19.6)	20(39.2)		1(2.0)	1(2.0)			51
SR04下層	10(33.3)	2(6.7)	5(16.7)	6(20.0)	5(16.7)		1(3.3)	1(3.3)			30
SR04中層	9(16.1)	1(1.8)	16(28.6)	16(28.6)	12(21.4)		1(1.8)		1(1.8)		56
SR04上層・支流	5(10.9)	1(2.2)	2(4.3)	12(26.1)	24(52.2)		1(2.2)		1(2.2)		46
SR03			1(14.3)	4(57.1)	2(28.6)						7
遺構全体	45(12.9)	6(1.7)	56(16.0)	88(25.1)	141(40.3)	2(0.6)	5(1.4)	2(0.6)	3(0.5)	2(0.6)	350
	収穫具	伐採具	土掘具	加工具	武具	調理具	紡織具	祭祀具	不明	素材	小計
サヌカイト	23(51.1)		51(91.1)	67(76.1)	137(97.2)				1(33.3)	2(100.)	281(80.3)
安山岩	10(22.2)		5(8.9)	3(3.4)	1(0.7)		1(20.0)				20(5.7)
結晶片岩	9(20.0)	4(66.7)		11(12.5)	3(2.1)		4(80.0)	2(100.)	1(33.3)		34(9.7)
粘板岩	1(2.2)										1(0.3)
緑泥片岩	2(4.4)	1(16.7)		1(1.1)							4(1.1)
ヒン岩		1(16.7)				2(100.)					3(0.9)
砂岩				5(5.7)							5(1.4)
泥岩				1(1.1)							1(0.9)
赤色チャート									1(33.3)		1(0.9)

表9　石器の器種組成と石材

以上，龍川五条遺跡について遺構・遺物のまとめを行ったが，事実報告に終始した感は否めない。弥生時代前期の様相は未だ明確なイメージが確立したとは言えず，今後もさらなる資料の分析・検討が必要となろう。

註(1)　藤好史郎　『中の池遺跡発掘調査概要－香川県丸亀市金倉町所在の弥生時代遺跡の調査－』丸亀市教育委員会(1982年)

(2)　平成２・３年度に調査された，弥生時代前期の環濠集落遺跡。現在，整理作業が行われており，その成果が期待される。

大久保徹也「鴨部・川田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成３年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局(1992年)

(3)　龍川五条遺跡を含めた龍川地区の遺跡周辺の微地形については，10㎝等高線図を用いた詳細な分析がなされている。

西岡達也・木下晴一編　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊龍川四条遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団(1995年)

(4)　力武卓治編　『福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集　環境整備遺構確認調査板付遺跡』福岡市教育委員会(1995年)

(5)　ＳＴ０４から出土した管玉の中から１点及びＳＫ４５から出土した管玉片１点の計２点については，京都大学原子炉実験所の藁科哲男・東村武信氏によって分析していただいている。その結果，ＳＴ０４資料は愛媛県松山市所在の持田町３丁目遺跡出土管玉のＡグループ原石に，ＳＫ４５資料は同遺跡出土管玉のＢグループ原石に一致するとの所見をいただいている。

真鍋昭文編　『持田町３丁目遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター(1995年)

(6)　分析の対象とした土器は，口縁部を含む破片及び完形品を１点として集計したものである。ただし，口縁部を含む破片のうち壷形土器の口頸部境と甕形土器の胴部の施文が判断できない（不明）小破片については集計からは除いている。

(7)　筆者は，以前に香川県における弥生時代前期土器の検討を行っており，その中で考えるならば，第Ⅲ期（前期後半の古い段階）に相当するものである。

拙稿「香川における弥生前期土器の様相」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター(1995年)

(8)　分析の対象とした石器は，すべての石器片を１点として集計したが，微細な剝片などについては集計の対象から除いている。

(9)　平井　勝　『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社（1991年）

(10)　註(9)文献

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第二十三冊

龍川五条遺跡 I

第1分冊

平成8年12月25日　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762　香川県坂出市府中町字南谷5001－4
電話　（0877）48－2191（代表）

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

印刷　タナカ印刷株式会社
住所　香川県大川郡大内町三本松658－3
電話　（0879）25－0185